
我輩はペロである

rozi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我輩はペロである

【Nコード】

N6426K

【作者名】

roz i

【あらすじ】

新婚家庭で暮らす子犬のペロは、自分のことを人間だと思っているが、成長と環境の変化の中で自分は人ではないと気づいてしまう。

犬がほしい

夢というほど大きなものじゃないけど、ヒロシの子供の頃の願いは犬を飼うことだった。

親にせがんで、どうにかなるものなら力の限り頑張って、親を説得しただろうが、公営団地で育ったヒロシは、子供ながらに「この家じゃ犬は飼えない」とわかっていた。

ごく平凡なサラリーマンだったヒロシの親は、自力でセレブになるなんて事は考えず、これまた他のごく平凡なサラリーマン諸氏と同じように、一縷の望みを宝くじに託していた。

年末になると、ジャンボを片手に「これがあたったらく」どうたらこうたらと夢を語るの、それを聞いたヒロシは、宝くじが当たりさえすれば、一家は大きな一軒家に引越し、そこで犬も飼える信じ、毎年クリスマスにはサンタに宝くじの当たり券をプレゼントトしてくれ！と願っていたが、いつも枕元に置かれているのはロボットやらゲーム機やらで、そのたびにヒロシはガッカリした。

それでもサンタの機嫌を損ねて、来年から来てくれなくなったらいけないと我慢していたが、ある年、枕元に大きな犬のぬいぐるみが置かれていたせいで、気持ちを逆なでされたヒロシは、ついに癪癪を起こし、25日の朝っぱらからサンタを、クリスマスを、中の下である自分の家庭を、子供のまずしいボキャブラリーの中で、精一杯に罵り、親を困惑させた。

その年以來、ヒロシはサンタクロースを信じなくなってしまったが、代わりに「大人になったら必ず、一軒家に住んで犬を飼おう」と心に決めた。

新居

20年後、ヒロシは一軒家には住んでいなかったが、犬は飼っていた。

実際のところ、小、中、高、大、と学生生活を送るうち、いつの間にか犬を飼いたいという幼いときの思いは薄れ、社会人になって、しばらくは犬を飼わずに過ごしていたのだが、結婚を決めたヒロシは、奥さんと住むための新居を物色していたときに、ペットOKの物件を見つけ、その時になってようやく、子供のときに立てた犬を飼うという誓いを実現させようと思った。

ヒロシと奥さんのマリエは籍を入れたその日に新居に入居した。そして、ホワイト・テリア犬のペロも、同じくその日に2人と一緒に新居へとやって来た。

ペロ産まれる

ペロの一生は、若い夫婦の生活と共にここから始まった。それまで彼の世界はペットショップの狭いケージの中だけであり、人に触られるにしても、それは、愛情を注ぐ対象としてではなく商品としてでしかなかった。

ここでは、すべてが違う。世界が信じられないくらいに広く、跳んでも、走り回っても壁にぶつかることはない。その代わりに見たこともない形や色をしたものに何度もぶつかり、そのたびにこれは一体なんだろう？ と気になってしょうがない。

いつも両隣のケージに居たほかの子供の姿はなく、上からも下からも、どこからも子供の声は聞こえてこない。この大きな世界に居る子供は自分だけで、あとは大人が2人。

その大人は、昨日まで自分のことを世話していた大人とはまるつきり違う。ずっと話しかけて来てくれるし、さわってくれる。そのさわり方は今までされた事のない心地良いものだった。

この2人は、ボクのことを喜ばせたくてたまらないんだ。

これが、産まれるって言うことなんだ。

ペロはそう思った。

平凡なヒロシと人気者のマリエ

ヒロシとマリエの結婚式は、籍を入れた1ヵ月後に行われた。親の遺伝子を受け継ぎ、ごく平凡な人間に育ったヒロシだったが、マリエは地方の女子アナだったため知り合いも多く、来賓の数は多かった。

人気者だったマリエの結婚を喜びながらも、寂しがる声やヒロシをうらやむ人、2人の結婚を不思議がる人が多く見られた。

2人の新居には、結婚写真が飾られ、その中には、親族に混ざり、首輪の代わりに蝶ネクタイをつけているペロの姿も写っている。

もともと、ヒロシが飼いたいと言い出したペロだが、どちらかと言えばマリエのほうがペロのことを可愛がった。

家事といっても、午前中にはあらかた片付いてしまい、今まで華やかな世界で生きてきた生活が急に変わり、交友関係も少なくなり、何をしていいか分からず寂しい午後に、ペロの存在はマリエの心を癒すものだった。

外の世界

「ペロ、お散歩に行くよ」

夕方になると毎日、お母さんはペロのことを外に連れ出してくれる。ペロは初めて家の外に出たときの感動を今も忘れない。

ペットショップから、今の家へ来たときに、これが新しい世界だと思い、よろこび心が躍ったが、翌日にはその世界の外に、さらに広い世界があることを知って驚愕した。

その世界はどこまでも広く、好奇心の対象は定まることのないほど無尽にある。聞いた事のない音がアツチコツチからする、ペロに区別できるのは、大人の声と子供の声、それだけで、新たに聞く音の正体は、なんなのかまったくもって想像できないような物ばかりだった。

けたたましい、不快な音をたて走る生き物がいた。形は自分と同じ子供のように四本足だが、その大きさは大人よりも大きく、どうにも生きていると思えない質感がするが、たしかに動き走っている。ペロは、すぐにお母さんの態度から、そいつが動いているときは近づいてはいけないのだと悟った。

外の世界では、自分と同じ子供の姿を見ることが珍しくなかった。みんな、それぞれ親に連れられて歩いている。初めて他の子供とすれ違うときに、ペロは緊張した。仕切りなしで他の子供と会うのは初めてだったから、どう接していいのか分からなかったのだ。ペロは出来るだけ大人のように、「自分はもうすぐ2本足で歩くんだっ」と振舞おうとした。

すぐに分かったが、自分の他にそんな風に振舞っている子供はいなかった。みんな、いきなり飛び掛ってこようとして大人に止められたり、やたらとお尻の匂いを嗅ぎたがったり。最初はビックリしたが、すぐに馴れた。

ペロも一度だけ、他の子のマネをしてみようかと思ったが、そん

な事をしていたら、いつまでたっても大人になれないかもしれないと思ってやめた。大人は誰もそんなことはしない。マネをするなら子供じゃなくて大人のマネをするべきだと思ったのだ。

ペロが一番ビックリしたのは、カラスと空だった。初めて外へ出たとき、気になるものが多すぎて、お母さんのことをあっちへこっちへ引っ張りまわしたペロは、黒い二本足の生き物を見たときに、特別すごい勢いで駆けだした。

あんまりにもすごい勢いだったから、お母さんの手からリードが離れてしまったほどだ。

そいつは、見たことのない形の真っ黒な体で、大きさは自分と変わらない。驚いたことに大人と同じように二本足で立っている！これも大人なんだろうか？ ペロはそんなことを思った。カラスはペロが近づくと、サツと空へと逃げてしまった。

その姿を目で追ったペロは、初めて外の世界には天井がないことに気づいた。

（すごいや！　すごいや！　すごいや！）

そして、この世界には大人と子供以外の生き物がいることも知った。

ペロは刺激に溢れた外の世界を大好きになったが、同時に畏怖の念も覚えた。ただただ、あたたかな感じのする家の中では感じなかった気持ちだ。

急に心細くなって、お母さんの足にピタリと身を寄せた。まだまだ、外に居たい気もするが、何となく今日はもう家に帰りたくなかった。

お父さん

一日の中で、ペロが楽しみにしているのは散歩だけじゃない。仕事を終え家に帰ってくるヒロシを、真っ先に出迎えるのもペロの楽しみのひとつだ。

エレベーターを降りた時点で、ペロにはヒロシの足音が分かる。それを聞くと、うれしくなって興奮してくる。本当はマリエもヒロシのことを一番に出迎えたがっているのが分かるが、どうしても我慢できず、ペロは玄関の扉が開くとマリエを差し置いてヒロシに飛びついてしまう。

ヒロシもペロの出迎えを喜んで、すぐにペロのことを抱きしめると、夕食の準備が整うまでの間、一緒に遊んでくれる。ペロはこの時間が好きだった。

休みの日には、ヒロシも一緒に三人で散歩に出かけた。外の世界で遊ぶことは、ペロにとって、いつだって特別な時間だったが、その中でも週に一度しかない、お父さんとお母さんと三人で出かける日は、特別に特別な日だった。

お父さんも一緒に散歩に行く日は、いつもより長く遊べたし、時には車に乗ってうんと遠くまで行くこともあった。

しかも、マリエは犬に洋服を着せることを恥ずかしがって、自分が連れて歩くときには着せたがらなかったが、ヒロシは好んだので、お父さんも一緒に散歩に行く時には、ペロは大人と同じように洋服を着ることが出来た。

ペロは洋服を着ると、自分も大人になったような思いがして、うれしかった。いつも「今ならボクも、お父さんとお母さんと同じ様に二本足で歩けるかもしれない」と思い、立ち上がってみようとしたが、なかなか上手くいかなかった。

「早く大人になりたいなあ」ペロはそう思ってウズウズした。

変化

幸せな生活が続いて、1年ほどした頃だった。少しずつ家庭内に変化の兆しが見え始めた。マリエが妊娠したことが理由だった。

始めのうちは、それほど変わったことは無かったが、マリエのお腹が目立つようになると、仕事から帰ってきたヒロシは、ペロを抱きしめるかわりに、まずマリエのお腹を触るようになった。

次に、お父さんは今まで、たまにペロの洋服やおもちゃ、お土産を買って帰ってきてくれていたが、それが無くなった。今でも洋服やおもちゃは買ってくるが、それはペロの物ではなく、いまここに居ない、誰か別の人のためのものだった。

しだいに、お母さんはダルそうにしている日が増え、ペロのことを散歩に連れて行ってくれない日が多くなった。

ペロは、お父さんとお母さんが、前ほど自分にかまってくれなくなってきている事に気づいたが、2人の様子を見ると、前より幸せそうで、何かすごいことを楽しみにしているのに気づいたので、自分も幸せそうに、何かを楽しむことにした。少しさみしいけど、それが家族にとって良いことだと思ったからだ。

お母さんが大変！

お母さんのお腹は、日に日に大きくなり、これ以上膨らんだら破裂してしまうんじゃないかと、ペロはひそかに心配していた。

そんな矢先、夜中にお母さんがひどく苦しみだした。お父さんは大慌てでお母さんのことを担ぐと、ペロをおいて出て行ってしまった。

おいていかれてしまったペロは、心配でたまらなくなり、家の中をウロウロしたり、玄関の扉の前で「クウーン」とうらめしそうにないてみたり落着かなかった。

もし、お母さんのお腹が破裂したらどうなるんだろう？ ペロは前に見た、車に轢かれた猫の死骸を思いだし身体が寒くなった。

山盛りのドッグフード

お母さんの匂いが強く残るベットの上で目を覚ましたペロ。昨日は寂しくて、つい、ここで寝てしまったのだ。

お父さんもお母さんも帰ってきておらず、家には誰もいない。ペロは起きてすぐに、また寂しい気持ちになってしまった。

喉が渴いたが、水入れには何も入っていない。ペロは空の容器をむなしく眺め、どうしようかと家の中を見回した。

思えば今までエサがなかったことも、水が切れたこともなかった。お父さんとお母さんが一晩居なくなっただけで、どうやって喉の渴きを充たしたらいいのかさえも分からない。

“クウーン” ペロは情けない声を出し、お父さんとお母さんの帰りを待ち焦がれた。

やがて、聞きなれた足音が近づいてきた。その音からペロは、お父さんがひとりで帰って来たことを察した。

ペロは扉が開くなりお父さんに飛びつき、“お母さんは何で居ないの？” “2人でドコ行ってたの？” “喉が渴いたのに水がないんだけど” とまくし立てた。

ペロの興奮をよそに、お父さんはいたって冷静で、お湯を沸かしコーヒーを入れると、ドカッとソファーに腰掛け一息つきだした。

ペロはその様子から、お父さんが疲れているのを悟った。

“疲れているとこ申し訳ないんだけど” ペロは空の容器を咥え水を催促する。

お父さんは意外にも、めんどくさそうな顔ひとつせず、笑いながら水を入れてくれた。そして、ペロへ向かってあれこれ話し出した。ペロにはお父さんの言っていることは理解できなかったが、その声色を聞いて安心した。優しく、幸せそうな声から喜びが伝わってきた。

お父さんはコーヒーを飲み終わると、家の中をアッチコッチ引っ

かきまわし、大きな荷物を抱えて、すぐにまた出て行ってしまった。
ペロのえさ入れには山盛りのドッグフードと水が入れている。
これで飢えることはないが、その量を見ると、しばらく帰って来そうにない。

“クウーン” ペロはエサには手をつけず、ふて寝した。

お母さんの帰宅

お父さんは帰ってくるが、お母さんは帰ってこない。

ペロは毎日、お母さんの足音が聞こえないか気にしていたが、いつも足音はひとつだけ。お父さんが今日もまたひとりで帰ってきた。それを知るとガツカリして気持ちが沈むが、それでも、玄関の扉が開くと共にどういうわけか体が反応して、大喜びでお父さんのことを迎えてしまう。

お母さんが居なくなってから、唯一いい事といえば、お父さんがよくペロのことを、かまってくれるようになったぐらいだ。

お父さんはソファアに座り、テレビを見ながらヒザに乗せたペロのことを撫でてくれる。

そのまま、だらしなくソファアで寝てしまい、朝になればペロのえさ入れを満タンにし、出かけていく。

その後は、夜になりお父さんが帰ってくるまで、楽しい事のなにもない長い時間が待っている。

そんな日が5日ほど続いた。その間ペロが散歩に連れて行ってもらえたのは1回だけだ。

5日目の朝、お父さんが出かけていった後、いつものように長い一日を過ごさなければいけないハズだったペロは、まだ日の高いうちに再びお父さんの足音を聞き驚いた。おまけに今日は足音がひとつだけじゃない！ “お母さんだ！！”

「ワンワン、ワンワンワン」

興奮してペロは、まだ2人の足音が半分も近づかない内に、扉の前で鳴きだした。

“お母さんが帰ってきた”この瞬間を待ち焦がれていたペロは、いつものように扉が開くと共にお父さんに、お母さんに飛びついた――ハズだったが、あせりすぎて、まだ扉が開ききらない内に飛んでしまい、郵便受けに激しく頭を打ち付けた。

それでも痛くない——いや、本当は痛い、今はそんなこと気に
とめてもらえない。

なんてったってお母さんが帰ってきたんだ！　これで、お父さん、
お母さんと一緒に、また3人で暮らせる。

そう思ったペロは、ヒロシとマリエの姿を見て戸惑った。

「……………」

お母さんの腕の中に、もうひとり人がいる。

「ペロ、ただいまー」ペロの戸惑いをよそに、お母さんは大好きな
笑顔でそう言ってくれた。

ペロは目をパチクリさせながら、マリエの足の周りをグルグルと
回った。

“きつと、新しい子供だ”ペロはそう思う。そして、自分がこの家
に来たときのことを思い出した。

すっかり忘れていたが、自分がここへ来るまえに居た場所、小さ
な何もない部屋で、周りには自分と同じような子供がたくさん居た
ところ。

“この子もあそこから来たんだ”ペロは、いまお母さんの手の中に
いる、この子と同じように、自分もお父さんとお母さんに抱かれて
来た日のことを思い出した。

病気の子供

その子が自分と同じでは無いことには、すぐに気づいた。家の中をアッチコッチ走り回ることも無く、一日中ベットで寝ている。

日に何度も大きな声で泣き、警報のようなその声色は実に不快だった。

その子が泣き出すと、お母さんはどこへ居てもすぐに飛んで行く。おかげで何をしていてもはかどらない。

せっかく元気になって戻ってきたというのに、お母さんは新しい子にかかりつきりで、前のように、ペロのことを散歩に連れて行つてはくれない。

だからといって、ペロはその子のことを恨んだりはいしない。

“この子は病気なんだ” ペロはそう思い、子供に同情した。そして、自分が元気なことに感謝するようになった。

その子は実際に病気だった——かと言って命に関わったり、障害があるような重い病気ではない。アレルギーを持っていたのだ。

最初の2ヶ月ほどは何も気にならなかった。ヒロシもマリエも犬と同居することに充分に気を使い、医師や周りの人のアドバイスもちゃんと聞いた。

自分たちがアレルギーを持っていないこともあり、きっと大丈夫だとも思った。しかし、3ヶ月を過ぎ、赤ちゃんとペロが接触する機会が増えたあたりから、赤ちゃんに発疹が出来たり、熱を出したりするようになった。

検診のときに相談した医師には、赤ちゃんがもう少し大きくなったら血液検査をしようと言われた。それまでは、アレルギーの原因を断定することは出来ないが、念のため赤ちゃんと犬を出来るだけ離しておくように言われた。この程度の症状で済めばいいが、ひどくなれば入院しなければならないような症状が出ることもあると念

をおされた。

その日から、ペロの居場所はベランダになった。

なにかの間違え？

ペロにはこの仕打ちの理由が分からなかった。

子供が来てから扱いが変わったとは言え、お父さんもお母さんも前と変わらずに自分のことを愛してくれているのは分かる。

毎日じゃなくても、お父さんは週に1度か2度は散歩に連れて行ってくれるし、いつも自分が玄関先で出迎えると喜んでくれた。

夕食が出来るまでの間、一緒に遊んだり、ひざの上にペロのことを乗せてテレビを見たりは昔と変わらない。

お母さんだって、子供が2人もいて大変そうだが、それでもヒマを見つければ、前と変わらぬ笑顔で接してくれる。エサを忘れられたことも、冷たい態度をされたこともない。

相変わらず寝たまんまで、一緒に遊んだりは出来ないが、最近じゃあ、ベットから出ていることも多いので、新しく来た子とも仲良くしていた。

この前も、お父さんとお母さん、子供、ペロの4人で公園に遊びに行った。

自分は何も悪いことはしてないし、新しい子と比べれば、世話だってそんなにかけていない。みんな仲良く暮らしていたはずなのに、なぜいきなりベランダに追い出されてしまったんだろう……。

ペロは、もしかしたらお父さんとお母さんが何か勘違いをしているかもしれない、ボクがベランダで暮らすのを望んでいると思っているんじゃないかと考え、吠えてみた。自分はこんな所に居たくないという意思を込めて。

お父さんもお母さんも、ペロが大きな声を出すのを嫌っているのを知っていたが、ほかに意思を伝える手段がない。

なんと目か吠えたところで、お父さんが出てきて、ペロは厳しく怒られた。

――ベランダでひとり過ごす夜は、寂しくてつらい。

ペロの口から、思わず“クウーン”という情けない声がもれてくる。怒られると分かっているながらも、その夜は、思わずなんども鳴き声をあげてしまった。

ささやかな楽しみ

翌朝になると、部屋の中の物音でお母さんが起きだしたのが分かった。いつものようにそれに続いてお父さんが目を覚ます。耳を澄ますと、誰がどこに居て、何をやっているのかが目で見ているようによく分かった。昨日までとなにも変わらず、お父さんもお母さんも家の中にペロの存在がなくても一向に気にしていないように思えた。

しばらくすると、ベランダの窓が開き、お母さんが出てきた。その笑顔は、やはりいつものように優しい。

ペロは自分が部屋から追い出されたのは一夜だけのことで、また部屋の中に戻るんじゃないかと期待をしたが、その思いもむなしく、お母さんはエサと水を置くと、2度ペロのことをなでて、部屋の中に戻ってしまった。

ペロはエサを見ても、食欲がわかず、陽を浴びながらふて寝した。

家の中からは、お母さんが家事をしている音が聞こえてくる。子供は相変わらずよく泣き、そのたびに家事をしている音は止んだ。

ペロは家の中の音に耳を傾けるのを止め、こんどは表に意識を集中してみた。塀が邪魔で外は見えないが、1階なので、人や車が行き交う音がよく聞こえる。ペロは外の様子が気になり、壁に手をつき立ち上がって覗こうとしてみたが、ペロの身長じゃあ、表を見るのにまだまだ足りなかった。

昼過ぎになると、お母さんは洗濯を干しにベランダに出てきた。

ペロは、この時とばかりにお母さんの足にまとわりついた。お母さんは洗濯を干し終えると、しばらくベランダでペロと遊んでくれた。

考えてみれば、久しぶりにお母さんと2人っきりで遊んだ時間だった。

この日から、お母さんが洗濯物を干す時が、一日で一番楽しみな時間になった。

長い夜

朝も昼も寂しいが、やはり夜が一番寂しかった。お父さんが帰ってきてても、出迎えることが出来ない。部屋の中から聞こえるお父さんとお母さんの仲のよい話し声。漂ってくる晩ご飯のおいしそうな匂い。

この前までその中に居ただけに、家族団らんの幸せそうな光景が鮮明に浮かぶ。それがより一層ペロに孤独な気持ちを起こさせた。“夜は長い”今はそう思う。

ある日ペロは、その長い夜の慰めを見つけた。お父さんの声、お母さんの声、新しい子の泣き声を聞き、部屋の中から聞こえてくる物音に耳を傾ければ、中の様子は容易に想像できる。その中に、自分の姿を想像してみた。

お父さんのヒザの上に乗っているペロ。お父さんはテレビを見ながら、ペロの背中を撫でてくれて居る。

キッチンから聞こえる、お母さんが包丁で刻むトントントンというリズムが心地いい。

新しい子が泣き出し、包丁の音が止まる。お父さんはお母さんに話しかけると、ペロのことをどかし、子供の様子を見にいく。再びお母さんが包丁を動かします。

ペロが部屋を横ぎり、お母さんの居るキッチンをのぞくと、それに気づいたお母さんは、ニッコリと笑いペロに話しかけてくれる。

ペロはお母さんの周りをグルリと回ると、部屋の隅に置いていた骨の形のおもちゃの事を思い出し、そっちへ向かう。

ペロがおもちゃを咥えて遊んでいると、リビングに戻ってきたお父さんが、それに気づいて、一緒に遊んでくれる。

ペロはまるで、本当に自分がそこに居るような気がした。お父さんに撫でられているところを想像すれば、本当に背中が温かくなっ

た。

大人になったペロ

毎晩、家の中で過ごす自分の姿を想像しているうちに、ペロはやがて新しい発見をした。

想像の中では大人に成れると気づいたのだ。

お父さんとお母さんと同じように2本の足で歩き、椅子に座り、手を使い大人と同じものを食べる姿を想像した。子供が泣けば、お父さんとお母さんの変わりに、自分があやしに行く姿を想像した。ペロは子供のあやし方がよく分からなかったが、お父さんが自分に優しくしてくれる時のことを思い出して想像した。

ペロは、幸せな姿を想像することとても気に入った。

ときに、それはみんなが寝静まり、家の中が静かになった後も続いた。帰ってきたお父さんに飛びつく自分を想像し、お母さんと一緒に散歩に出かける姿を想像し、服を着せてもらっている姿を想像した。

ある朝、お父さんの足音を聞きながら、自分も大人に成って、お父さんと一緒に仕事に行く姿を想像してみた。

家の外に出て、表を歩く。車道を車が走り、向こうからは大人に連れられた子供が来る。ペロの視線はその子のをはるか上から見下ろしている。誰も自分に飛びついてきたりしない。

家の近くの公園を通り過ぎたところで、ペロの空想は終わってしまった。その先の道がどうなっているのか知らないのだ。

空想からさめると、ペロは知らず知らずに自分の足を噛んでいることに気づいた。

だいぶ噛んでいたようで、少し痛む。

我輩は猫である

「やあ、君」

その日の午後。ペロが部屋の中の様子をさぐっていると、不意に後ろから話しかけられた。

見ると、ベランダの手すりの上に猫がいる。猫は足音を立てずに歩くとはいえ、ペロは声を掛けられるまで、彼の気配を一切感じなかったことに驚いた。

「少しお邪魔してもいいかね？」

猫はペロの返事を待たずに、スッとこちら側に降りてきた。

「食べないのであれば、その食料を、少し分けてもらいたいのだが」猫はペロのエサに目をやりそう言った。いままで他の動物がいう言葉をここまで鮮明に理解できたことはない。しかし、ペロはそのことを別段不思議とも思わなかった。それよりも彼の紳士的な物腰に感心した。

猫はペロがポケットと自分のことを眺めている間に、返事を待たずにエサを食べだした。

猫は半分ほどエサを食べると、満足したのか食べるのを止め語りだした。

「しかし、あれだねえ……君たち犬ほど惨めな生き物はないね」

そういう猫の声は、一見同情しているように聞こえるが、優越感に浸っているようにもとれる。

「犬というのはボクのことかい？ ……そうならなぜ、そんな事を言うの？」

「そこだよ！ 君たち犬は、自分が犬であるということすら分かってない者が多いい——」

猫は語気を強めて言った。

「——名前は？」

「ボクはペロ！」

「自分の名前は知っていても、自分がなんであるかは知らぬとは――実に嘆かわしい！」

猫は大げさな身振りで嘆いた。

「名前なんてものはね、大したものではないんだよ。私なんて行く先々で違う名前で呼ばれている。トラ、ノラ、耳欠け、タイガー、マイケル、漱石。それで、一向に不便はない。結局のところ人間の都合でつけられるのであって、我々にとってはそんなもの無くて、かまわないもののさ――それなのに君たち犬と来たら、自分の名前を呼ばれると、嬉しそうに目を輝かせ、千切れんばかりに尾を振る。いまの君だってそうさ、自分の名前を名乗ったときの嬉しそうな表情！　ぜひ君自身に見せてあげたい――自分の名前は知っていても、自分が何であるかを知らないとは、まるで実の無い果実、ツナの入っていないカルカンの様ではないか！　――本来は、その逆でなければいけないのだよ」

猫はそう言うと、ヒョイツと元居た手すりの上に飛び乗った。

ペロには、猫の言っていることはよく分からなかったが、その振る舞いと、優雅な身のこなしに心惹かれた。彼が言うのであれば、きつとそうなんだろうと思った。

「あなたは何なの？」口をついて出たその質問に、彼は、

「我輩は猫である――君が会いたいと思えば、明日もまた来るよ」

そう答え、塀の裏へと消えた。

縄張り

7月に入り強くなってきた日差しを避け、小屋の中でウトウトしている、次の日も同じ時刻に猫はきた。

「やあ、ご機嫌いかがかな？」

ペロが顔を上げると、やはり昨日と同じように手すりの上へ猫が立っている。

「ワンワンワン」

ペロも立ち上がり、舌を出し尾を振りながら歓迎の意を示した。

「それでは、お邪魔するよ」

猫は身軽にペロを飛び越えベランダへと着地した。

「こう暑くては堪らん。水を一口頂くよ？」

猫はそう断ると、ペロの返事を待たずに水に口をつけた。そして無遠慮にエサを食べだした。

このところ食欲の沸かないペロにとっては、そんなものどうでも良かった。それよりも、この猫がたずねて来てくれたことが、無性に嬉しかった。お父さんが帰ってきたときと同じで、反射的に喜びを表現してしまった。

今日も猫はエサを半分ほど平らげたところで、さも今気づいたように喋りだした。

「ところで、君たち犬のそのハアハアッという息づかい、暑っ苦しくてたまらん——何とかならんもんかね？」

そう言われてペロは、初めて自分が舌をだらしなく出し“ハアハアッ”と息をしている事に気づいた。

「……………、ハアハアッ、ハアハアッ」

舌を引っ込め、息を止めようとしてみたが、どうにも長く続けられない。

「まあ、無理にとは言わんよ。ここは君の縄張りだし、楽にしてくれたまえ」

そう言われてペロは、なんだか安心した。

「ところで、縄張りってなに？　あと、昨日も言っていたけど犬ってなに？　ボクの呼び名？」

「そうだなあ、どちらから説明しようか……、どちらも君に理解してもらうのは少し難しい様な気がするが……とりあえず、まあ、縄張りというのは、その人が所有する場所の事さ。たとえば、この部屋——」

猫はそう言うと、窓の方へ目をやった。

「ここは君の飼い主の縄張りであり、このベランダはその所有者から君に与えられた縄張りになるのだよ」

何となく猫の言っていることが分かるような、分からないような、ペロはムズムズするものを覚えた。

「うゝむ……もっと分かりやすく説明してあげるとだな。このお皿は誰のものだい？」

猫はエサ入れを見て言った。

「それはボクのだよ！」

ペロは答えが分かるのが嬉しくて、揚々と答えた。

「そうさ、これは君のものだ——しかし、これをくれたのは誰かな？」

「お父さんが持って帰ってきてくれたんだ！」

猫はペロが飼い主のことをお父さんと呼ぶのを聞いて、すこし可哀想な気持ちになったが、いまはその事に触れずに話を続けることにした。

「それと同じことだよ。この家も君の飼い主……まあ、お父さんと呼ぶ事にしよう。お父さんが手に入れて、ベランダを君に分けてくれたんだ——すなわち、ここは君のもの、君の縄張りなんだ」

「ボクの物なの？」

「そうさ、君のお皿の中へ入っているエサを分けてもらったのと同じで、いま私は君の縄張りの中へお邪魔しているというわけさ。だから、本来なら私が君の振る舞いに対してとやかく言うのはお門違

いなんだよ」

ペロはこの場所が自分の物と聞いて、なんだか誇らしく思った。いままで家の中から追い出されたことを嘆いてばかりいたが、そう考えるとベランダでの生活もまんざらでもないような気がした。

「あなたの縄張りは？」

「流動的だよ——今は通りの向こうにある2軒の家の屋根、2軒とも屋根は赤色なんだ。私は赤が好きでねえ。それと、踏み切りの近くにあるスナック『はちきん』、コンビニ1軒。あとは土井のばあさん家かな」

そう言いながら猫は、先日、商店街の魚屋を若い雄に取られたことを思いだし、腹が立った。

“ そんなにたくさん縄張りがあるなんて、すごい ” ペロは感動した。「君にこんなことを自慢しても、何にもならないが、後学のために聞いておくが良い。我々、猫の持つ縄張りこそ本物の縄張りと言ってよい。私から言わせてもらおうと、人間の持つ縄張りほど子供騙しなものはない。彼らの持つ縄張りとは、そのほとんどがまやかしなんだよ。——このベランダが君の縄張りである以前に、お父さんのものであるように、この家もお父さんの物である以前に大家のものであり、その大家も本当の意味で自分の物なんて何ひとつ持っていない。彼はこの建物を持つ限り、永久に国にお金を払い続けなくてはいけない。そうなればもはや、ここが誰のものなのか分かったものじゃない——彼らは何かを手に入れるために常に誰かに対価を払っている。愚かなのは彼らがその事に気づいていないという事さ」

それだけ言うとは猫は、ひょいと手すりの上に飛び乗った。

「我々ネコは、その人間が払った対価の上に縄張りを作る——もうひとつの疑問については、また次回に話すでしょう」

そう言い残し、燦然と去っていった。

ペロはやはり、猫の言うことはよく分らないと思った。

おばあちゃんの所へ

マリエとヒロシはこの所、ペロのことが心配だった。グルグルと自分の尻尾を追い掛け回したり、足を噛んだり、無駄吠えをすることが多くなった。それらの行動は総じてストレスから来ることは容易に分かった。

出来るだけかまってあげようとは思うものの、生まれたばかりの赤ん坊がいて、その子がアレルギーとなれば、なかなかそうも行かない。

もうすぐ子供の6ヶ月検診がある。その時にアレルギーの有無を調べる血液検査も予定している。

「もし原因がペロなら、お盆休みにペロのことをおばあちゃんの所へ連れて行くよ」

ヒロシはこのままの状況で飼うことはペロにとっても可哀相だという思いからそう言った。田舎で暮らすおばあちゃんは、おじいちゃんに先立たれて4、5年になる。寂しい一人暮らしだし、きっと可愛がってくれるだろうと思った。

猫の上に人を作らず、犬の下に人を作らず

その日の猫の訪問は、声をかけられるよりも先に分かった。

血の匂いを感じ、視線を向けると、そこに猫がいた。

口にはネズミを咥えている。

「やあ、相変わらず退屈そうだね」

そう言うのと、猫はこの前までと違い、断りなしにベランダに入ってきた。

ペロは物珍しさから、猫の口元をまじまじと見つめた。猫はその視線の意味を勘違いしたのか、詫びるように言った。

「不快だったかね？」

ペロは慌てて“そんなこと無い”と首を振る。

「今日は久しぶりに自分で獲物を獲ったから、君に見せに来たのだよ——なんせ君は無知だからね。こういう事も知っておいて損はないだろう」

ペロは素直に“うん”と頷いた。

「君はもし、飼い主……お父さんやお母さんがエサをくれなくなったらどうする？」

そんなこと考えたことも無かった。お父さんやお母さんがエサをくれなくなったら……。

「……わからない」

ペロが素直にそう答えると、猫は満足そうに笑い、咥えていたネズミを置いて講義を始めた。

「人間は君たち犬も我々猫も同じように、人にエサをもらい生きているように思っているが、実際は似て非なるもの、まったく別のものなんだよ——君たち犬は、完全たる飼い主の所有物として一方的にエサを与えられている。たとえるなら飼い主は、車にガソリンを入れるように、携帯電話を充電するように君たちにエサを与え、その生命活動を維持する——もし飼い主がそれを怠る事態になれば、

大抵の場合、君たち犬は生きてはいきれないだろう——我々猫の場合にはもう少し能動的で自らの力でエサを得る——」

「——かと言って、毎日せっせとネズミを追い掛け回したり、ゴミをあさっている分けではないので、勘違いしないでくれたまえ。正確には、エサを探すというよりも、エサを用意してくれる人を探すと言ったほうがよいだろう。自分のためにひと働きしてくれる人材を探すのだよ。それは難しいことではなく、ただ人目に付く場所で寝ていれば良い——分かるかね？」

ペロが何も分かっていないのは、その表情を見れば聞くまでも無かった。

「……それって結局、人にエサを貰っているって事でしょう？ 君の言う犬っていうのと、やっぱり同じような気がするけど？」

「違うよ。犬はあくまで誰かの所有物であり、所有物である間はその対価としてエサも寝床も与えられる。ネコの場合は、誰の物でもなく、人間はエサを払い、屋根を与え、その対価として一時でも自分の物という幻想を抱こうとする——犬はあくまで人間の下であり、ネコは常に人の上に在る」

そこまで言うのと、猫はすこし悲しそうな顔をした。

「最近是我々猫でも、飼い猫なんかの間では、犬化が進み寂しい限りだよ……（まあ、それも楽な生き方かもしれないが）」

猫は、土井のぼあさんのところで飼い猫のように暮らす自分の姿を想像してみた。老齢に差し掛かっているせいか、最近どうにも弱気ではない。

猫はネズミを咥えると、ひょいと塀に飛び乗った。

「私はまだ、2、3ネズミを自慢して回らなければいけない場所があるので、これで失礼するよ」

猫が去ったあと、ペロはいつにもまして、今日の猫の言葉は分からないことが多いな、と思っていた。

夜中の訪問者

その晩、ペロの元へ猫以外の訪問者があった。

寝ていたペロは、夜中、急に人の気配を感じて目を覚ました。春に吹く風は気持ちがいいが、秋に吹く風は何となく物悲しい。人の気配や視線というのもそれと同じで、ペロにとって、お父さんやお母さんの存在を側に感じる時は、心地がよく、向けられる眼差しは陽の光のように暖く思ったものだが、同じ人の気配でも、今側にいる人間のものは、夏に時折からだにまとわりつくように吹く、生暖かくて気持ちの悪い風を連想させた。

視線を上げると、真っ暗な中に浮いている目玉がふたつ、こつちを見下ろしていた。普通より白目の多いその目玉は闇によく映えた。それを見たたん、ペロは体が寒くなった。

「バウッ」

とっさに吠えた瞬間、ペロの目の前に何か飛んできた。

“ペチッ”と音を立てて落ちた物が食べ物であることは、匂いですぐに分かった。

コンビニで売っているフライドチキンの発する、えもいわれぬ香りにペロは怪しい人影よりも、すぐにそっちへ夢中になってしまった。

ヒロシもマリエも、今までペロにドッグフード以外を食べさせたことは無い。ペロは初めて口にする、大人と同じ食べ物に夢中になった。

それは、信じられないほど旨く、食べることに夢中になったペロが、再び顔を上げたときには、氷柱のような眼差しをした男の姿はもう無かった。

猫がネズミを持ってきてから、2日たち3日たち、かれこれ1週間以上過ぎているが、あの日以来ネコの姿を見ない。

別に毎日来なくてもよいが、ペロはちょうど、猫に例の不気味で冷たい目をした男のことを話したかったので、すこし残念だった。

男は猫と入れ違いに、あの日以来、毎晩来るようになっていた。いつも何かしら、ペロに食べるものを持ってきた。ペロはこれが、猫の言っていた人間がエサを払うという事なんだろうか？ と考えた。「難しいことはない、ただ寝ていればいい」猫はたしかそんなことを言っていたように思う。

だとしたら、これは自分自身で得た食べ物なんだろうか？ それともボクは、あの男の所有物なんだろうか？ 何のことやらペロにはよく分からなかった。自分は猫のように、あれこれ物事を考えるようには出来ていないような気がした。（とにかく、こんど彼が来たら聞いてみよう）

男は毎晩、ベランダの外で数分、時には数十分過ごした。ペロに注意を払うのは、いつも最初だけで、後はずっとカーテン越しに、部屋の中に向かって視線を向けていた。まるで厚い遮光カーテンの向こう側を透視できるかの様に。

時折、部屋の中から聞こえてくる話し声や物音にペロが耳を傾けていると、気づけばこの男も同じように、耳を澄ましている。

ペロは、いくら美味しいものを持ってきても、やはりこの男に好意がもてなかった。どうしても気味が悪い、嫌な感じがする。男が去ったあと、いつもペロは緊張から開放された様にホッとする。

ひつじ日

7月の20日は、ペロにとって今までで一番ツイていない日だった。ヒロシとマリエの子供が、6ヶ月検診で、はっきりと犬アレルギーだと診断されてしまったのだ。医師には酷くなれば喘息や湿疹で入院しなければいけない事もあるのだからと、犬を手放すことを強く勧められた。

おまけに、この日マリエは外出前に慌てていたため、ペロにエサも水もあげるのを忘れたまま出かけてしまった。

今年一番の暑さの中、ペロは水の無いまま過ごしていた。中は熱がこもって暑いので、ペロは小屋の側面にできた日陰に身をよせて、強烈な日差しを避けていた。

それでも、コンクリートで出来たベランダの床に反射した日差しが目を突いて痛かった。

頭がぐるぐるするのは、まぶしさのせいだと思い、ペロは目をつむって見たが、そうすると、よけい酷く目が回る気がする。

“ハアッ、ハアッ、ハアッ、ハアッ、ハアッ” ペロは自分がだらしなく舌を出し、荒い呼吸をしていることに気づいて、いつか猫に注意されたことを思い出した。

しかし、舌を引っ込めてみようなんていう気も起こらない。体力が入らず、ピクリと動かすことも面倒だ。

(どこに行っただろう)

ペロはいつもなら、すでに洗濯を干しにベランダに現れているはずのマリエのことを考えた。そして、新しい子が来てから、すっかりと変わってしまった自分の扱いを思い、このところ薄らいでいた気持ち、ムクムクと強くなって来ていることを感じた。

うれしい、さみしい、はっきりと分かるのはこのふたつだけ。ペロはそれ以外の気持ちがあることを知っていたが、他のはどれも、そのふたつと比べると曖昧で、なんて言っていないのか分からない。

意識していなければ、自分でも感じていることに気づかない気持ち
が沢山ある――。

「それは憎いって言うんだよ！」

不意に誰かの声がした。猫ではない――彼よりもずっとハリのあ
る、若くて強い声だ。

重い頭をそのままに、ペロは視線だけをゆっくりと動かしてみた。
地面に日差しを受け影が伸びている。

（黒いヤツだ！）ペロは影だけを見て、その声の主がカラスだと
悟った。向きを変えて姿を確認する元気も無かったが、その必要も
無い。カラスならば、本体も影も一緒だと思った。

「憎悪、怒り、怨み、憎しみ。お前ら犬は遠い祖先の時代に、すっ
かり抜かれて忘れてしまっているが、世の中には喜びよりも強い感
情が沢山ある！ それらすべては負の感情だ！」

カラスの声は頭の中でキンキン響き、ペロは頭痛がした。

着地する音でカラスが手すりから降り、ベランダの中へ入ってき
たことが分かった。

「お前は憎いんだ！ 子供のことが！ アイツが来てから、お前の
扱いはすっかり変わっちゃった！ それまでの家族との関係は実に
良好だったじゃないか！？ お父さんもお母さんもお前のことを愛
し、優しく、宝物のように扱ってくれた！ お前もよくお父さんと
お母さんの言うことを聞いて、2人を困らすようなことは何ひとつ
やらなかった。それぞれが互いのことを思いやり、みんな幸せだっ
たじゃないか。――それなのに、アイツと来たら、考えるのは自分
のことだけ！ 気に入らないことがあれば、すぐに泣き、おまけに
一日中気に入らない事だらけで、ずっとわめいてる！ そのくせ自
分じゃ何にもやらないんだ。信じられるか？ 何にもやらないんだ
ぞ！ 全部人にやらそうとする。そのせいで、お父さんもお母さん
も忙しくてお前にかまってくれない――」

「――ああ、でもな、かまってくれなくなるだけなら、まだ、まし
かも知れないな。今のお前の扱いはそれ以下だ！ 部屋の中から追

い出されて、真夏の暑い中、こんな場所に追いやられた。何でだか分かるか？ お前はアイツに嫌われたんだよ！ そのせいで家庭から締め出されたんだ！ ついには水もくれなくなっちゃった」

カラスは大きくちばしで、空の容器を“コンコン”と突いた。

「お母さんはアイツにかまうのが忙しくて、もうお前の事なんかどうでも良くなったんだ。たえこのまま死んだって悲しみはしねえ——お前はアイツのと同様、いや、むしろそれ以上にそんなお母さんの事を憎んでいる！ お前の方がお母さんとの付き合いも長し、お前の方がうんとイイ子だ。なんてたってお前はお母さんのことを愛している——それなのに、お母さんはお前の気持ちを無視して、お前よりも、アイツのことを大切にする。お前はそんなお母さんのことを憎んでいる——」

足音で、カラスがこっちに近づいて来ているのが分かった。

「——でもなあ、ペロちゃん。こればかりは、お母さんが悪いわけじゃないんだぜ。どちらかと言うと、悪いのはお前だ……なぜだか分かるか？」

ペロは答えを知っている。ずっと前から気づいていた。けれどそれを認める気はなかったし、誰かにはっきりと言われたくも無い。まだそれを受け入れるべきではない。認めればすべてが終わってしまう。心の芯がくずれることを分かっていた。

むなしくても、なれると信じることで自分を守っていた。

「お前はなあ……人間じゃないんだよ」

カラスの顔が、ヌツと眼前に現れた。意地悪く、満足げな笑みを浮べている。

「どんなに賢くても、どんなに立派でも、犬は人間にはなれない——そして、すべての犬は、どんなに下等な人間よりも劣る」

ペロは何も感じていないつもりだった。カラスの言うことなんかに耳を貸さない、第一カラスの言葉なんて自分には分かるはずが無いじゃないか。——もちろん、表情ひとつ変えていない。そのつもりだった……しかし、カラスはペロの顔を見ると、声を上げて満足

そうに笑った。

「カーッ、カッカッカッ！　おおー可哀相なペロちゃん。きみは――」

？――！？

不意に黒い塊が飛んできて、ものすごい勢いでカラスを体ごとさらった。

驚いてペロが塊の飛んでいった方向を見ると、2メートル以上も先で、猫がカラスの首筋に顔を埋めていた。

不意打ちを食らったカラスは、わずかばかり抵抗を試みようと、足をバタバタさせたが、すぐに息の根を止められてしまった。

「初めてだよ」

顔を上げた猫は、ペロを振り向いて、状況に不釣り合いなほど冷静にそう言った。

「カラスを仕留めたのは初めてだ……今までそんなこと思った事もないし、猫がカラスを仕留めたなんて話、聞いたことも無い」

やはり、猫は冷静にそう言ったが、よく聞くと声には興奮の色が少し混ざっている。

「どうやら、この所すこし猫運があるみたいだね」

セリフの内容とは関係なしに、その言葉にはペロに気を使った、慰めようとしている気持ちがこもっているみたいだった。

実際ペロは猫の声を聞いて、心を少し落ち着けた。先ほどまで聞いていたカラスの声と比べれば、その声はどこまでも優しかった。

「……待っていたまえ、私が水を何とかしてあげよう」

ペロの状態を一瞥して、熱にやられていることを察した猫は、そう言うと、ベランダとベランダを仕切っている板の下にある、わずかな隙間を窮屈そうにくぐり、隣の家へと入って行った。

ペロはその姿をぼんやりと眺めていた。もう喉が渴いているのかどうかよく分からない。悲しいとか嬉しいとか、自分が今感じていることも分からない。心も体も、まるで感覚がなかった。

もういいよ

入っていった隙間から、こんどはお尻を前にして猫は戻ってきた。2リットルサイズの大きなペットボトルの先端部分を咥え、重そうに引きずっている。

「はあっ」

仕切りをくぐり抜けた所で、猫はしんどそうにタメ息をつき、ペロの方を振り返る。ベランダの端と端。普段なら何のことない距離だが、この荷物を引きずっての移動は骨が折れる。

猫はもう一度、ペットボトルを咥えなおし引きずり始めた。咥えにくく歯と歯茎に掛かる負担が気持ち悪い。

おまけに強い日差しが、中に入った水にキラキラと反射してその光が目をつく。

今まで猫除けに置いてあるペットボトルを不快に感じたことはないが、初めてその光を腹立たしく思った。

やっとの事で、ペロの前までペットボトルを引きずっていくと、猫は息を荒らしながらも、精一杯平静を装い、いつもの気丈な態度で、

「君の隣人は猫が嫌いみたいだね。おかげで助かったよ」

と言い、ペットボトルを甘咬みし、一番やわらかい穴の開けやすそうな場所を探った。

「さあ、ペロ君。ここら辺りにガブツと噛み付いて中の水を飲みたまえ！」

猫の言葉に、ペロは興味無さ気な視線を返し、「もういいよ」と消え入りそうな声で返事をした。

「!?!? ……もういいとは?」

「……もう、いいんだよ」

“やれやれ”と猫は頭を振り、少し考えた。

「水はここへ置いていくよ。気が変わって飲みたくなれば、噛み付

いて穴を開ければいい。君なら難なく出来るだろう——私はカラスを人目のつかないところまで持って行って、ゆっくりと食べるとするよ、あまり人が見て気持ちのいい光景ではないだろうからね」

猫はカラスを咥えようとして、ふと、思い出したかのように言った。

「そう言えば、狼は人を食べると人間になるらしいね」

猫がチラリと様子をうかがうと、ペロは何も聞いてない風にソッポを向いて、うつ伏せていた。しかし、耳がピョコンと立っているのを見て、猫は満足そうに話を続ける。

「知っているかい？ 狼男という生き物がいてだな、普段は人間として暮らしているが、満月の夜には、人間でも狼でもない、実に恐ろしい姿に変身するらしいよ——本当にそんな生き物がいるなら、一度見てみたいね」

見ると、ペロはもつとその話を聞かせてもらいたそうに、興味を隠し切れない視線を猫に向けている。

「猫が人を食べるのは問題ない。トラやライオン、カラスなんか人が食べるのも問題ない。しかし、狼が人を食べるというのは、どうやらいけないらしくてね。その、タブーを犯したものは、天罰が下り、かなしいかな、人でも獣でもない異形の道を歩かなければいけないるらしい——犬も狼も同じようなものだし、どうかな、それでもよいなら、君も人を食べてみては？ 君が犬であると言うことを、どうしても受け入れられないのであれば、少なくとも今よりは人間に近づくことが出来ると思うよ」

“ブルブル”とペロは激しく首を横に振った。人間を食べるなんて自分には到底出来ない、とんでもない事だと思った。

猫は満足そうにわらい、

「我々ネコは、人間に13年飼われると、化け猫になるそうだよ。きっと、それが我々にとってのタブーなんだよ——猫は猫らしく、犬は犬らしく、人は人らしくしてないと、何者でもなくなってしまう」

猫はカラスを咥えて、持ち上げてみた。重さがズシツと体にかかる。（これは、行けないな）と思い、いつものように手すりまでひとつ飛びに上がるのを諦め、一度ペロの小屋の屋根へ上がり、そこから手すりへ飛び移った。

「君が元気なら、明日もまた来るよ——犬であることを、受け入れる気持ちがあるなら、いつか約束した、犬とは何かについて話そう」猫は悠々と去っていった。その姿はまるで、カラスの死骸を誇らしげに見せびらかしているように見えた。

彼が去ったあと、ペロは目の前のペットボトルに思いっきり噛み付いた。

猫の考え

“明日また来るよ”そうは言っていたものの、猫はやはり来ないのではないか？ ペロは何となくそう思った。

来る時も去る時も気分しだい。猫の前では約束なんてなんの効力もない。そんなことを考えていた矢先に、猫はやって来た。

「やあ、ペロ君。体調はどうか？ 回復したかい？」

そう言うと、猫はいつものようにサツとベランダに下りてきた。

「元気だよ！ 本当に来たんだ」

「……なんだい、ペロ君？ きみは私が来ないと思っていたのかい？」

「うん……何となく」

ペロは自分の思っていたことを素直に話した。すると猫は、

「きみは我々ねこのことを大分わかって来たみたいだね」と嬉しそうに言った。

「約束したからといって、何も絶対に守らなければいけないなんて決まりはないからね——昨日と今日じゃ、気分も変われば状況も変わる。昨日の自分と今日の自分、どちらを大切にしなければいけないなんて、言わなくても分かるだろう？」

ペロはおとなしく“うん”とうなずいた。しかし、なんとなく本能的に腑に落ちないところがある。

「……でも、もし来なかったら、きっとボクはガッカリしたよ」

「それは、可哀相だが仕方がないさ。私は君や、ほかの誰かを喜ばす為に生きているわけじゃないからね」

猫は当然のことだと言わんがばかりに、サラッとそう言った

「もし、私が今日、なにかしらの理由で本当はここへ来たくなかったとするだろう、けれども君との約束があるので嫌々来たとしたら、『君の為に来てやった』と言う思いになる。私はそれを実に醜い行為だと思う。約束なんてものに縛られて、自分のやりたくないこと

をするのは、偽善というものだよ——こういう言い方だと、どうにも我々ねこが自分のことしか考えていない、勝手な生き物のように聞こえるかもしれないが、実際はそういうわけじゃないから、勘違いしないでおくれよ。猫にも良心はあるし、他者の気持ちを推し量る器量だってある。ただ、誰かに何かをする時に、義務や体裁を気にして行動することはないし、相手がそうされることを望んでいるという理由からでもなく、私が相手のよろこぶ姿が見たいとか、いい事をしたという満足感を得たいという思いからするのだよ。あるいは、しなかったことによる罪悪感から逃れる為に……結局のところ自分勝手なのかもしれないね」

ペロはやはり、よく分からなくて小首をかしげた。

それだけ

「ところで、今日はそんな話をしに来たのではないね」

猫が言うと、ペロは“ウン”とうなずいた。その瞳には、いつもの無邪気な輝きではなく、意を決したような少し大人びた色があった。

「犬って何なの？　ボクは犬なんでしょ？　どうすればいいの？」

「どうもしなくなっていていい。飼い主の保護のもと、のんびりと食べて、寝て、春が来れば発情する。飼い主に愛想を良くするのを忘れさえしなければ、犬としての最低限の義務は果たした事になるだろう」

「……それで？」

「それだけさ。誰もきみにそれ以上のことは望んでいない。今の君のようにあれこれ考える必要は無いのさ。ただ、本能の声にしたがって行動すれば、それが一番犬らしい。――散歩に連れて行ってもらったり、遊んでもらったり、人にかまってもらうことを一番の楽しみに生きればいい。人がなにか君に求めれば――そうだな、玄関の新聞を取ってきたり、2、3芸を要求されたり、きっと難しいことは何も言っていないだろう――その時は出来る限りのことをやってあげればいい。人も喜ぶし、君も楽しいだろうね」

「それから、どうすればいいの？」

「言っただろ、どうもしなくていい。それだけさ」

「それだけ……」　ペロは猫の言葉をなぞるようにつぶやいた。

「その後は……そうしていれば、どうなるの？」

ペロの懇願するような目を見れば、なにかもっと、特別なことを期待しているのが分かる。

「どうなるってこともないさ。不自由の無い日々を送っているうちに、きみは古い、やがていくつかの思い出を残し、生命が終わる……そういうものだよ」

猫の言葉に、ペロは明らかに満足していない様子だった。

「……なんていうか、それじゃ、あんまりにも寂しいね……」

その言葉を聞いて、猫はすこし意外な顔をした。そして期待するようにペロに質問を投げかけた。

「寂しいとは、どういうことかな？ やはり、人になりたいかね？」

「ちがうよ……そりゃ、人になれば最高だけど……それは、無理だって分かってる……ただ、なんて言うか、犬らしい生き方っていうのが、なんだか……初めて会ったときに猫がボクに言ったでしょ、『君たち犬ほど惨めな生き物はいない』って……その言葉の意味が分かるような気がするよ」

猫は嬉しさを隠しきれず、ニンマリと笑った。

「ペロ君、きみは賢いね——じつに賢い。いまどき猫でも君ほど賢いのはそうはいないよ」

猫はヒラリと、ペロの小屋の上に飛び乗った。そして話を続けた。

「あの時の非礼を詫びよう、ペロ君。……私は犬は嫌いだが、君のことは好きだよ。なぜなら他の犬のように惨めじゃないからね——君が食べて寝てするだけの犬らしい生き方を、寂しいと思ったのは、きっと、そこに何かが足りないからなんだよ。君はその足りない部分を、大人の人間になるという、大げさに言えば夢を持つことによつて補っていた。大抵の動物は将来に対する展望なんて、なにひとつ持っていない。その時その時で目先の空腹を充たす程度のことしか考えられないんだよ——」

猫はまた、ヒラリと小屋から飛び降りた。

「——野生であれば、それも仕方あるまい。生き抜くことが、ひとつの目標と言ってもいい……しかし、犬や飼い猫の場合は、すでにその部分が欠落している。生きるという行為を人間に依存しているのだよ。目的なく生きるのは、ただ生命を消費しているに過ぎない。君が少なくとも、私の興味を引く程度には魅力的だったのは、たとえ滑稽でも、生に目的を持っていたからだろうね……自分が人でないと思ったとき、君の夢は消え、生に目的が無くなってしまった……」

…」

なんとなく、ここで2人とも黙ってしまった。会話の狭間に訪れた沈黙はセミの声や、遠くで聞こえる風鈴の音を引き立て、今が夏なんだということを2人に再認識させた。

猫は改めてペロの顔を、全身から醸し出される雰囲気を見て、昨日までとは違う成長したものを感じた。ペロはもう一人前で、自分と対等なんだと思った。

「……君と同じように、私も寂しいよ、ペロ君」

猫は不意にベランダの手すりに飛び乗った。

「ほかの犬と違い、将来を思い描くことを知っている君は、目的の無い日々が虚しいと知っている……あせることは無い、ゆっくりと受けいれていけばいい。あるいは、また、なにか見つかるかも知れないしね」

そう言うと、ゆっくりと手すりの上を歩き、去っていった。

土井のばあさん

そこだけ、すっぱりと時の流れに取り残されたかの様な趣を残している、木造の古い平屋建ての家が並んでいる一角がある。

猫は2週間ほど前、ペロにネズミを見せたその足で、土井のばあさんにも見せてやろうと、そのうちの一軒をたずねた。

外から家を眺めただけで、猫はすぐ異変に気づいた。人間だろうが動物だろうが、生き物には総じて、その生命から発せられる命の灯りというような気配があるが、その日、家からは生きるものの発する灯りは感じず、かわりに死者の匂いがした。

猫は特に戸惑うことも無く、冷静に“ああ、逝ったか”と悟ると、“昨日は別にそんな色も無かったが”などと、ばあさんの様子を思い出していた。死ぬ人とは大抵、いくらか前からそういった雰囲気が出ている。

猫は家の裏にある、洗濯物を干すぐらいしか使い道の無い、せまい庭へと回ってみた。

いつもと同じように、縁側の窓は開いている。そこから中をのぞくと、土井のばあさんは、質素な部屋の中、座布団を二つに折って枕にし、寝ているように死んでいた。

いいばあさんだったなあ、と思う。最後は寂しかったのかと気になった。あれだけ、よくしてもらったのだから、死に際に居てあげるぐらいの事は出来ればよかったなあ、とも思った。

“ニャー”

特別意味も無いが、猫は土井のばあさんに向かって一声鳴いてみた。春の終わりに、ばあさんが押入れから引っ張り出してきた、年季の入った風鈴が返事をするかのように“チリンチリン”と音を立てた。

捕まえてきたネズミを見て、ばあさんがどんな反応をするのか、見てみたかったと、すこし残念に思った。

周りの人間が、ばあさんが死んだことに気づいたのは、翌日になってからのことだった。

それまで、尋ねてくる人も無く静かだったばあさんの家に、少しばかり人が出入りするようになった。

猫はお通夜の晩、低い塀の上に陣取りながら、弔問に訪れる人の様子を眺めていた。死を悲しんだり惜しんだり、ばあさんのことを思う気持ちがあるのなら、少しは生きているうちに、それを出してやって、尋ねてくるぐらいしてやればよかったのにと不満に思った。ばあさんだって、死んでから来られるよりも、生きているうちに来て、話し相手にでもなってもらった方が、どれだけ嬉しいか分からない。

猫の惘然とした表情に気づき、ばあさんの親族がこちらに怪訝な表情を向けてきた。

「あの猫、あそこにずっといるんですよ」

「なんだか、気味が悪いな」

などと言う会話のあと、ばあさんの息子が猫のことを追い払いにやって来た。

“君たちが、まったく顔を出さなかった、この2年の間、私は3日と空けずにここへ尋ねて来ていたのだよ”猫はそんなことを思いながら、ノロノロとふてぶてしい態度で、土井のばあさんの家を後にした。

今ではもう、来る用もないのに、猫は長年のクセで夕方になると、気づけば土井のばあさんの住んでいた家へ来てしまう。

（明日はペロ君に、どんなことを話そうかな？）そんなことを考えながら、しばし、まどろんでいた。

ヒロシと散歩

盆休みに入る前、ヒロシはペロのことを連れて散歩に出かけた。前は毎日マリエに連れられて行っていた散歩も、今では週に1度か2週に1度、こうしてヒロシが連れて行ってくれるに過ぎない。

この日の散歩が、いつもと違うことに、ペロは近所の公園を通り過ぎた辺りで気づいた。今まで来たことのない道に差し掛かると、ペロは興奮した。外の世界のさらに外側。公園より向こう側は、前に自分が大人になってお父さんと一緒に仕事に行く想像をしたときに、どうなっているか分からなくて、上手く想像できなかった世界だ。

お父さんと一緒に、信号が変わるのを待って、大きな通りを渡る。それだけの事が、ペロからしてみたら、国境を越えるに等しい行為だった。通りを渡ったところで街並みにたいした変わりはない。家があつて、ビルがある。販売機やコンビニを通り過ぎる。平凡な街並みだが、それでも、ペロからしてみれば、初めて来る場所に変わりはなく新鮮でワクワクした。

この日、ヒロシは遠くの河川敷までペロを連れて行った。

子犬のように走り回るペロの姿を見て、なにか少しだけ満たされる気がした。自分も子供に戻って、あんな風に走り回りたいなと思った。

子供のころは、犬をを飼えばその存在が自分のすべてになると思っていた。兄弟のように共に過ごし、彼らの言葉を理解し自由に会話できるとさえ思っていた。もっと仲良くなり、もっと愛情を注ぎたはずだと思う。

犬は飼ったが、自分はもはや子供ではなくなっていた。ペロに対して申し訳ない気持ちがある。

明日、ペロを連れおばあちゃんの所へ帰る。そうするしかないが、やはり寂しかった。

川の向こう

その日は快晴だった。空はどこまでも青い。

猫はいつになく饒舌に、昨日の散歩のことを話すペロの言葉を聞いていた。

「そうかい。それはよかったね」

嬉しそうに話すペロを見て、本心からそう思う。

「猫は川を見たことある？」

「ああ、あるとも。私は昔、あの川のもっと向こうに住んでいた」
さらりと言った猫の発言を聞いて、ペロは衝撃を受けた。考えても見なかったが、言われてみればそうだ。家の外に、公園の向こうに、新しい世界が広がっているように、川の向こうには、また新たな世界がある。

「すごい！どこまで続くの！？」

「さあね？　きっとどこまでも続くのだろう。カゴの中のように壁にぶつかって、これ以上先に進めないという事はないよ」

ペロは考えただけでワクワクした。自分も猫のように自由に遠くまで行ってみたいと思った。

「何があるの！？　川の向こうには？」

その質問に猫は、思い出すように遠くを見つめた。

「……そうだね。大きくは変わらないよ。川の向こうも、こちら側も――ただ、あえて言うなら、大きな屋敷があった――私がまだ、だいぶ幼かった頃、そうだね、今の君と同じぐらいの年だったと思うよ。私は川の、もっとずっと向こうにある屋敷を縄張りに入っていた。親元を離れて、しばらくの間苦労したあげく、やっと手に入れた居場所で、あんまりにも居心地がよかったものだから、半ば飼った猫のようにその屋敷に入り浸っていたよ――この屋敷の主人はどうやら私のことなど、眼中にない様子で、毛嫌いすることもなかったが、構うことも一切なかった。良くしてくれたのが、その家の娘で、

大学生だった彼女は私にポコというあまりありがたくない呼び名をつけて可愛がってくれていたよ」

昔のことを語る猫の表情は、いつもよりも穏やかだった。ここで話を終わらせたつもりだったが、ペロは話に続きがあるものだと思いい、好奇心のこもった視線を向けている。

それに気づいた猫は、またやんわりとした口調で語りだした。

そんな風には思わない

「人間の時間で言って1年半ぐらい、私はそこを寝ぐらにしていた。適度な期間だったと思うよ。それ以上長くあそこに居れば、きっとノラ猫としての本質を忘れてしまっていただろうね——ある日、屋敷の主人と娘が喧嘩をしてね。娘は勘当され、家を出たんだ。父親の性格をよんでいた娘は、あらかじめそうなる事を予測していたので、家を出るときの手際はじつに鮮やかなものだったよ——」

「どうして、喧嘩したの!？」

「……私の嫌いな約束が原因だよ。娘は大学に通っているといっても、べつに意味があって通っていたわけじゃない。まあ、行かないより行ったほうがいいだろう。その程度の考えから通っていた分けだが、ある日、どうしてもやりたいことが見つかったね。そのためには、大学なんて通っている間がない。それで、学校を辞めて好きにやりたいと思ったわけなんだ——ところが父親は、入学する時にした学校を卒業するという約束にこだわって『やりたいことは卒業してからやれと』と言うわけだ。『親との約束を守れないような奴は子じゃない』とも言った。娘は娘で『本当にやりたいことなら、無意味に2年も3年も我慢できるようなものじゃない』と駄々をこねるわけだ。結局、父親は親子の関係よりも約束を重要視し、娘は約束よりもやりたいことを優先した……まあ、実際は喧嘩と言うよりも、自分の意思を押し通して生きる為に、親元から離れていったと言った方が正確かもしれないね……とにかく娘は家から出て行ったんだ——」

「なんだか悲しいね……」

「そうかな? 私はそんな風には思わないが」

「でも、猫はそんな事があったから、約束が嫌いなんでしょう?」

猫は笑みを浮べた。

「そんな事はないよ……まあ、その出来事が考えるひとつのキッカ

ケになったのは事実だけど、なにもそれだけで嫌うわけじゃない——その後、色々と見たり感じたりした結果、自分は約束が嫌いだと知ったんだ。——まあ、私が猫だということも大きく影響しているだろうね。約束を律儀に守る猫なんて、そうそう居るもんじゃない」

そこまで言うとは猫は、空へ視線をやった。

「カラスに限らず、鳩だろうがスズメだろうが、鳥というものが気に入らない。理由は分からないが、これも、きっと生理的なものだろう。しかし、嫌いでも、彼らが空を舞う姿は美しいと認めざる得ない——君もそう思うだろう？」

“うん” ペロは勢いよくうなずいた

「しかし、彼らが最も美しいのは、高く自由に飛んでいる時ではないんだ——飛び立つ瞬間、羽ばたき、地上から足が離れる瞬間に、彼らは最も美しく輝く——彼女はあの瞬間、美しく飛び立ったんだ。それも初めて。巣立ちの飛行だ。——例え、その先うまく飛べなくて墜落したとしても、目的の場所にたどり着けなかったとしても、飛び立った瞬間の輝きが消えるわけじゃない」

ペロは猫の言葉を心の中で反芻し、理解しようと努めた。

彼の言うことは、たとえば頭でわからなくても、体の中に浸透し、自分の一部になるように思えた。

君にも来るよ

「その後、私も屋敷を出た。とてもいい機会のように思われたからね——そして、初めて車の行き交う、大きな4車線の道路を渡った。——君は車に轢かれた猫の死骸を見たことがあるかい？」

ペロはうなずき、昔見た猫の死骸を思い出し、嫌な気分になった。「私もそれまでに、なんとか猫の死骸を見ていたから、自分もそうなるんじゃないかと怖かったよ……今思うと滑稽だね。まだ道の渡り方すら、満足に知らなかったのだから——ともかく私はその日、世界を広げた。——あの日以来、車に轢かれた猫の死骸を見ても、怖いと思わなくなり、かわりに、猫が道を渡ろうと駆け出した瞬間を想像し“きっと、輝いていただろな”と思うようになった。死骸を見て、単純に同情したり、惨めだと思うよりも、少しばかり想像力を働かせて、死ぬ前に輝いた、冒険心や自由、勇気、生命といったものを思うほうが、どれだけマシか分からないよ」

ペロは思った、自分にもそんな瞬間は来るのだろうか。犬である限り猫や人間、鳥のように自由に輝く瞬間なんて、一生来ないのではないかと思われた。

それを、見透かしたように猫は言う、

「君にも来るよ、一生涯忘れられないような、輝く瞬間が。——私なんて、いくら偉そうなことを言ってみても、年をとり、今はただ惰性で飛んでいるだけ。もう二度と飛び立つような輝きを放つ瞬間はないだろう。——君にはまだ、いくらでもそういう機会がある。ただひとつ勘違いしてはいけないのは、猫や人と同じようにやろうとしないことだ。犬には犬なりの輝き方というものがあるからね——」

そこまで言うと、猫は家の中の様子に意識を向けた。玄関の扉が開き、誰かが出て行った音がした。

「——今日は、なんだかいつもと様子が違うね」

「うん、猫も気づいた？ 実はボク、今日おばあちゃんて言う人の所へ連れて行かれるんだ」

猫は目を丸くしてペロのを見た。

「ほう、そうなのかい。――そのわりに、君はいつもと変わらぬ態度だね。なんていうか……もう少し取り乱したりしてもよさそうなもののに」

「しょうがないよ。……ボクは受け入れたんだ、おばあちゃんのことへ連れて行かれることを」

猫はペロの態度に感心した。やはり、見所のある犬だと思う。

「……そうか、君のためにもその方がいいのかも知れないね。……しかし、少しばかり残念だよ。話し相手がいなくなってしまう。人間は私の言葉を理解しないし、動物は知性が足りないのが多くて困る……それに、もう少し君の成長を見て居たかった気がする」

ペロは、その言葉を聞いて嬉しくなった。猫は自分のことを遠まわしに褒めてくれているのだと分かる。会ったばかりの頃と比べると、彼が自分のことを認めてくれているのも、その態度でわかる。

「まだ少し、時間はあるよ。最後までなにか話を聞かせてよ」

ペロの言葉にうながされて、猫は話を続ける。

「……その屋敷には、使用人と言われる人間が何人か居てだね。その中の河村という男が私は好きだった。ほかの使用人はなんだか惨めな感じがした。それもまあ、当然で、使用人というのはお金を貰うかわりに、主の身の回りの世話をあれやこれやとやらされるのだからね。君たち犬も、大抵は惨めな物だが、使用人というのはやはり、同じ人間同士で優劣がつくというのが、犬と人間の関係よりも、いっそう惨めな感じがしたね。――しかも、

悪いのが彼ら自身の考え方で、つねに不平不満を持ち、主のことをやっかみ、内心では自分の境遇を恥じている。――しかし、その河村という男には、そういった屈託したところがなかった。自分の仕事に誇りを持ち、完璧にこなすよう努力していた。不平や不満、やっかみと言ったものとは無縁で、自分が存在する意義が分かっている

たんだ。彼の言動、立ち振る舞いには威厳が漂い、ヘタをすると屋敷の主人より立派に見えた。——どんな立場や生き方でも、極めればそこに魅力が生まれるものだよ——」

「ボクにもそうなれと、猫はそう言いたいのか？」

「——うん？ まあ、そんなところかな」

猫もペロも穏やかに笑った。

窓の向こうで気配がし、ペロと猫が注目すると、中からマリエが出てきた。

不意に猫と目が合ったマリエは、その堂々と落ち着いた雰囲気、相手が猫だということも忘れて、思わず“ペコリ”とお辞儀をしてみました。

“ニャーア”猫も愛想のよい返事を返す。ペロは目を輝かせて、面白そうに2人のやり取りを見ていた。

「ペロ、お風呂に入るよ」

マリエに呼ばれると、ペロは猫のことを一瞥し、屈託のない笑顔を送ると、軽やかな足取りで部屋の中に入っていった。

猫もペロの後ろ姿に、暖かい笑顔を送った。

美しい毛

ヒロシのおばあちゃんが住む徳島まで、車で行くとなれば、結構長いドライブになる。

子供とペロを同じ車内に乗せることに、やはり不安があるので、最初マリエと子供は新幹線と電車を乗り継ぎ、別々に行こうかと思っていたが、いかんせんまだ幼い赤ん坊のことなので、いつお腹を空かしたりオシメを濡らしたりで泣き出すか分からない。なれない旅に動揺しグズリだせば泣き止まずことも容易ではない。ならば、融通の利く車で一緒に行こうと言うことになった。

ヒロシが職場の先輩に車を借りに行っている間に、マリエは出来るだけアレルギーに影響がないように、ペロの体をきれいに洗おうと思った。

マリエはペロのことを部屋の中に入れると、ベランダの窓を閉めようとし、ふと思いとどまった。アレルギーのために、部屋の空気を密閉させとくのはよくないと思い、網戸だけを閉め、そのままペロのことを風呂場までつれて行った。

体を洗われることを嫌う犬は多いが、ペロは苦になかった。濡れることは、やはり少なからず不快な気もしたが、体を洗うときには、常にマリエかヒロシが側にいるので、その存在が安心感を与え、恐怖心を感じることもなく、水に濡れる不快感よりも、優しく洗われる心地よさの方が勝っていた。

それに、ヒロシやマリエが毎日お風呂に入るのを知り、大人がするのなら自分も嫌がらずにすべきだ、という幼少時代に感じた思いが大きい。

マリエはペロの体を丁寧に洗いながら、ふつふつと感傷的な思いが湧いてくるのを感じた。やはり、寂しい思いがする。それに、子供が出来てからというものの、あまりにもペロに対しての扱いが疎かになっていたことを恥じるような気持ちも感じた。

「……ゴメンね。ペロ」

ペロに対してではなく、独り言のように、そうつぶやいた。

“ぶるぶるぶるぶるっ”

風呂場から出ると、ペロは激しく体を振り、体についた水分をそこら中に撒き散らした。

マリエは苦笑いを浮かべながら、大きなタオルでペロの体を包む。ドライヤーで体を乾かしてやりながら、マリエは改めてペロの毛は綺麗だと思った。そのやわらかくて白い毛は、子供のようにな垢な純粹さを感じさせる。

ドライヤーを当てながら、マリエはペロの美しい毛に見惚れ、ペロはドライヤーの風とマリエの手の優しさにウットリとした。

朱に染まる

不意にペロが“ピクリ”と何かに反応した。ドライヤーの音に掻き消されがちだが、向こうで猫の鳴き声が聞こえる。普通の鳴き声ではない。叫ぶような激しい鳴き方だ。

なにごとかと、マリエが脱衣所の引き戸を開け、廊下に出てみると、居間に見知らぬ男が立っていた。

一瞬で心臓が凍りついた。陽光が差し込む部屋の中、男の周りだけが、暗く冷たい空気に支配されている。声にならぬ短い悲鳴を上げ、マリエは立ちすくんだ。

後ろには玄関の扉がある。咄嗟にそちらへ向かって駆け出しそうになったが、奥のベビーベットには子供が寝ていることを思い出し、踏みとどまる。

この状況で、一瞬たりとも子供をひとりにすることは出来ない。

“ワンッ！ ワンッ！ ワンッ！”

ペロが今まで聞いたことのないほど、激しく吠え立てる。“グルルッ”と男に向かって低いうなり声を上げた。

窓の外では、猫も相変わらず激しい声を立てているが、猫の声もペロの声も、どちらも、まるで遠い場所から聞こえてくるように、マリエの耳には不鮮明に聞こえた。

男がこちらを見つめている。一瞬が永遠のように長く感じる。状況が理解できないが、男の醸し出す雰囲気は尋常ではなく、恐ろしいことだけは確かだ。

男がフツと動き、ペロの前になにか投げてよこした。

ペロは目の前に落ちたチキンに目もくれず、男がこちらに向かって歩みだした瞬間に、足に向かって飛び掛った。

男は悪態をつき、噛み付かれた右足を、思いつき振り上げ、ペロのことを乱暴に振りほどいた。

小さなペロは壁まで飛ばされた。

ペロに噛みつかれ、男の視線が自分から外れた瞬間、立ちすくんでいたマリエの体は、呪縛からとかれた様に動き出した。

考える暇もなく、男の脇を通り抜け、ベットまで行くと、子供のことを抱き上げた。

ここからなら、玄関よりも窓のほうが近い。窓へ目を向けた瞬間、強い衝撃を受け、床に押し倒された。

子供をしっかりと抱えたまま、倒れたせいで、肩から落ち、拍子に目の前が暗くなるほど頭を打ち付けた。

子供が火のついたように泣き出した。

その声を聞くと、すっかりしなれば。自分がなんとかしなければと、気丈な意思が湧いてくる。動揺が治まり、恐怖心で浮ついていた意識が冷静に戻った。

男が自分に覆いかぶさって来る。手には刃の長いアーミーナイフを持っているのが見えた。

男がなにか、途絶え途絶えの息の中で言っている。低くこもり滑舌の悪い声だ。

この男を知っている。マリエは急に男のことを思い出した。自分がまだ、ローカル局のアナウンサーをやっていた時に見た顔だ。

公開録画のときには必ず見、テレビ局の周りでも何度も見かけた。この男から花束を貰ったことも、ファンレターを貰ったこともある。

男はマリエの首にナイフを突きつけ、恐ろしいような、情けないような声で、恨みがましい言葉を自分勝手に吐き続けた。

急に男の体が跳ね上がり、マリエの身体が自由になった。

ペロが男に飛び掛り、首筋に牙を突き立てたのだ。男は悲鳴を上げ、転げまわりながらペロのことを振りほどこうと、悶えたが、ペロは容易に離そうとはしない。

マリエは必死で、子供を抱えながら窓へ向かった。

あの時、網戸だけにしていた窓には、男が掛けたのであろう、鍵がしっかりと掛かっていた。

窓が開くと、マリエが外に逃げるのと入れ替えに、猫が飛んで中

に入ってきた。

しかし、猫があっと思う間もなく、男は噛みつかれた拍子に落としたナイフを、手探りで拾い上げると、ペロの体に深々と、それを突き刺した。

ペロの澄んだ白い体毛が朱に染まる。ペロの小さな体は、一瞬にして、そのほとんどが赤くまみれた。

刺された拍子に、筋肉が収縮して、さらに強く、さらに深く、ペロの牙は男に食い込み、喉を食い破った。

“ああ、嗚呼”猫はこの世のすべてを嘘だと思った。

唯一わかること

もう、日が暮れる。猫はやはり、ここへ来てしまう。低い塀から夕焼け空を見上げる。カラスが巢に帰る姿が見える。

土井のばあさんの居た家には毎日来るのに、ペロの居たマンションにはあれ以来、一度も行っていない。

べつに、もう行く用事もないが、それならここだって、もう来る用事はないのである。用があるとか無いとか、理由はそんなところじゃない。猫は分かっている。あそこに行つて、ペロが居なければ、寂しい気持ちになるだろうと。

寂しくなるただけに、わざわざあんなところに行くことも無い。実に犬らしい、名誉ある死に様だったと思う。しかし、そんな事よりも、やはり生きている方が100倍良いと思う。

猫の死骸を見て、悲しむよりその前の生を想像しろ。そんなことを言っていた自分が恥ずかしくなる。どんなに退屈でも、惨めでも、やはり生きている方がいい。生前どんなに輝いていても、それで死が悲しくなるわけじゃない。むしろ輝けば輝くほど悲しみは大きくなる。そんなことにいまさら気づいた。

“ああ、分からない。世の中のことは何もかも分からないことだからだ” いまの猫に分かっていることは、ただ、死が悲しいということとだけだった。

“……さてよ、死が悲しいということは、生きていくということは、それだけで喜びに溢れているのか？ ……いや、そんなことは無いな。ただ生きていくだけじゃ、死の悲しみに釣りあうほどの喜びではない……なら、やはり、輝かしい瞬間を沢山作らなければ……しかし、輝けば輝くほど、死の悲しみがさらに……”

そんなことを考えているうちに、猫はお腹が減っていることに気づき、そうすると、自然と『スナックはちきん』の痩せたママの姿が思い浮かんだ。

ゆつくりと起き上がり、ノロノロと『スナックはちきん』に向かうとしながら、猫は若い雄に取られた、エサ場の魚屋を思い出した。

“ 取り返そう ”

気づくと商店街の魚屋に向かって、足が進んでいた。“ きつと負けるだろう ” と思う。しかし、“ それでもいい ” と思う。

どんなに高く飛んでも、どんなに遠くまで飛んでも、みんな最後には、同じようにどこかに着地して、2度と飛び立つこともなくなってしまう。

虚しいと思うが、どうせなら、そうなるまで精一杯やってみようと思った。

ペロ産まれる(後書き)

まずは最後まで読んでいただいております。

もともと、この話を書き出したのには、ちょっとした経緯がありまして、細かいことはblog.livedoor.jp/rozi561015/archives/2010-03.html#20100328に書いているんで、もし気になる人が居たら、そちらを読んでいただければと思います。

しばらく、ネット環境のないところへ行くので、お返事が遅れると思いますが、出来れば感想聞かせてください。批判的な意見でも大歓迎です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6426k/>

我輩はペロである

2010年10月8日14時03分発行